

保護回復事業計画評価検証シート

- 1 保護回復事業計画 対象種名 **イヌワシ**
- 2 計画策定年度（評価基準年度） **平成18年度** 2006年度
- 3 保護回復事業計画の評価年度 **平成25年度** 2013年度

4 計画の概要

(1) 現計画における課題

- ①長野県におけるイヌワシの繁殖率の急激な低下
 - ・繁殖期における営巣地周辺での影響行為
 - ・森林及び里山の管理停止に伴う餌場環境の悪化
- ②違法な飼養や捕獲、観察者の接近やカメラマンによる営巣攪乱

(2) 現計画の目標・取組事項

- ◆目標
- ・当面10年間は、これ以上繁殖率[※]を低下させない
 - ・1980年代と同様の繁殖率50%を目指す
- ◆取組事項
- ①開発等の影響低減
 - ②生息情報の収集・管理・利用
 - ③生息環境の改善
- ※ 繁殖率…テリトリーを持つペア数に対する巣立ちヒナを育てたペア数の割合

5 計画策定以降の対象種の動向

| 指 標 | 計画策定時 | 評 価 時 | 動 向 |
|--|--|--|-----|
| 確実に生息が確認されているペア数 | 2006年 (H18年) 22ペア | 2013年(H25年) 19ペア | ➡ |
| 1995年～2012年 平均繁殖参加ペア数 平均繁殖成功ペア数 のべ繁殖成功ペア数【参考】 平均繁殖成功率 ※ | 1995年～2004年 (10年間) 13.3ペア (13～15ペア) 3.4ペア (1～6ペア) 34ペア 25.5% | 2005年～2012年 (8年間) 13.6ペア (13～14ペア) 3.4ペア (2～4ペア) 27ペア 24.9% | ➡ |
| 1997年～2012年 繁殖に参加した 14ペアの繁殖動向 | 期間の前期('97年～'04年)、後期('05年～'12年)で繁殖成功回数を比較 ・繁殖成功回数が増加したペア…4ペア/14ペア (29%) ・繁殖成功回数が減少したペア…8ペア/14ペア (57%) | | ⬇ |
| 補 足 事 項 | <p>・ 確実に生息が確認されているペア数について、2004年と2013年を比較すると、ペア数は3ペア減少しており、生息状況は悪化傾向にあると推定した。</p> <p>・ 平均繁殖成功ペア数、平均繁殖成功率はほぼ横ばいで推移したが、繁殖参加したペア数を一定期間で比較すると、繁殖成功回数減少ペアは繁殖成功回数増加ペアを大きく上回っており、繁殖状況は悪化していると推定した。</p> <p>※ 繁殖成功率…繁殖参加を確認したペア数に対するヒナを巣立たせたペアの割合 (長野イヌワシ研究会による生息・繁殖状況等の調査結果にもとづき作成)</p> | | |

矢印凡例 ⬆改善 ➡やや改善 ➡横ばい ⬇やや悪化 ⬇悪化

6 計画への対応状況

(1) 対象種の動向が悪化につながった事例

| 事例No | 確認者 | 事例の概要 | 個体数 | | 生息環境 | | 危惧要因 | |
|------|-----|---|-----|---|------|---|------|-----|
| | | | 増 | 減 | 改 | 悪 | 改 | 悪 |
| 7 | 研究会 | 新聞記事による生息情報の漏えい事例（1件） H19 生息地の情報漏えいによる絶滅危惧要因の増大 | | | | | | ● |
| 18 | 研究会 | カメラマンによる餌付け（1件） H22 事実確認が出来なかった事例のため、現状維持で整理 | | | | | | ● |
| 23 | 県 | 特定会社のヘリコプター飛行ルート調整の難航（1件・継続中） H24 問題のある飛行コースの調整に対応して貰えない事例 | | | | | ● | |
| 25 | 県 | 市民団体HPにおける生息情報の漏えい事例（1件） H24 生息地の情報漏えいによる絶滅危惧要因の増大 | | | | | | ● |
| 件数計 | | | | | | | 1 | 1 2 |

(2) 対象種の保護回復に向けた取組の実施状況と評価

| 事例No | 実施者 | 取組の概要 | 個体数 | | 生息環境 | | 危惧要因 | |
|-------------|------------|---|-----|---|------|---|------|---|
| | | | 増 | 減 | 改 | 悪 | 改 | 悪 |
| 1,2,3 ほか | 右記 | 関係機関による情報交換（10件）、森林整備の取組（2件） H16 研究会,県 H19,H20 国有林主権,A町,研究会,県(本庁・現地) | | ● | ● | ● | | |
| 4,5,6 ほか | 研究会 県・環 | 繁殖地近隣での送電線管理作業の改善（9件） H18～H25 研究会、電力会社、県で毎年協議を継続実施 | | | ● | | ● | |
| 7 | 県 | 新聞記事による生息情報の漏えい事例への対応（1件） H19 情報漏えいに対する注意喚起を実施 | | | | | ● | |
| 10 | 県 | 繁殖地近隣での有害鳥獣駆除の自粛要請（1件） H20 近隣への立入と付近での猟の自粛が実施された | | | ● | | | |
| 11 | 研究会 県 | 雪で落下した巣(巣棚)の修理（1件） H20 研究会と県で巣棚を復元、H25巣への出入りを確認 | | | ● | | | |
| 13 | 研究会 | 公開シンポジウムで大型猛禽類の生態等を普及啓発（2件） H20,H23 シンポジウムで基調講演、パネラーに対応 | | | | | ● | |
| 15 | 研究会 県・環 | 繁殖に影響懸念のあるグライダーの飛行ルート調整（1件） H22 協会から飛行者に注意喚起が図られることとなった | | | ● | | | |
| 21,30 ほか | 研究会 県・環 | 繁殖地近隣での公共土木事業等の対応改善（3件） H23～H25 繁殖期間の工事中断、事業区域変更で配慮された | | | ● | | | |
| 22,27 ほか | 研究会 県・環 | 県内ヘリ運航各社の飛行ルート確認と保全協力要請（6件） H24 県警、民間、計7社を確認、6社は問題ない旨確認 | | | | | ● | |
| 25 | 研究会 県 | 市民団体HPで公開された生息情報の削除要請（1件） H24 要請により団体の公開ページは削除された | | | | | ● | |
| 29 | 研究会 県 | 米軍のオスプレイ飛行訓練に関する要請活動（1件） H25 防衛省、環境省に対して情報開示と適切な対応を要請 | | | | | ● | |
| 32,34 ほか | 研究会 県・環 | 巣ごとの繁殖課題整理のための現地調査・打ち合わせ H25 5月～1月(8回実施) 生息状況、課題まとまる | | | | | ● | ● |
| 33,36 | 研究会 県・環 | 巣ごとの情報管理のための内部用情報マップの作製 H25 6月～(検討:6回実施) 作成作業継続中 巣ごとの影響範囲を示す外部提供用マップの作成 H25 6月～(検討:6回実施) 作成作業継続中 | | | | | ● | |
| 35 | 研究会 県・環 | 繁殖影響行為に関する相談対応フローの作成 H25年 9月 数年間検討されていたフローを確定した | | | | | ● | |
| 件数計 | | | | | 6 | | 6 | 5 |

評価凡例 増…増加 士…現状維持、変化なし 減…減少 改…改善 悪…悪化

研究会…長野イヌワシ研究会（団体については、「11 保全団体の概要」を参照。）

国…中部森林管理局、 県…自然保護課、 環…県環境保全研究所

7 保護回復実施者等による取組の自己評価

(1) 評価者 長野県（計画策定者）

(2) 評価における特記事項

県内におけるイヌワシ保全活動の中心的役割を担う、長野イヌワシ研究会と十分な意見交換を行った上で評価を行った。なお、研究会の活動エリアは長野県全域をカバーしている。

(3) 取組に関する評価

① 取組内容の質・量の評価

| 項目 | 評価 | コメント |
|-------------|----|---|
| 取組の方法や質は適切か | ○ | 保護回復事業計画の計画事項(①開発等の影響低減、②生息情報の収集・管理・利用、③生息環境の改善)については概ね適切に取り組むことが出来た。特に電力会社の影響行為への対応においては、影響行為の想定される事業計画は確実に事前相談されるなど、影響低減への対応は根付きつつある。 |
| 取組内容は量的に十分か | △ | 計画事項の①開発等の影響低減、②生息情報の収集・管理・利用については量的に適当な取組が出来た。③生息環境の改善に関しては、森林整備による餌場環境の改善は一部の生息地で着手したが、全体的に見ると量的に十分とは言えないため、△の評価とした。 |

② 種の保全との結びつきに対する評価

| | | |
|------|---|--|
| プロセス | ○ | 3つの計画事項に取り組んだ結果として、目に見えるような効果が発揮されるまでには至っていない状況ではあるが、繁殖への影響低減に関する取組については、最低限の影響は排除する方向で取り組めた。 |
| 絶対評価 | △ | イヌワシの保全に向けて各種対策に取り組んでいるが、種の保全まで至っていない状況である。イヌワシの生息・繁殖状況は悪化、もしくは悪化傾向にあり、生息・繁殖状況の改善を図るためには、巢ごとに明らかになってきた課題や問題点に対して更なる個別対応が必要である。 |

評価凡例 ○:十分 ○:適当 △:やや不足 ×:不十分

③ 保護回復事業計画に関する評価

| | |
|----------|---|
| 計画・取組の成果 | <ul style="list-style-type: none"> ①毎年調査を通じ、生息や繁殖状況、課題がより正確に把握されつつある。 ②コアメンバー(研究会、環境研、自然保護課)による、生息情報の共有化と生息情報等の整理・活用に関する取組に着手した。 ③繁殖等の影響行為に対して、行政も参加した検討体制が確立された。 ④落下した巣棚の復元作業実施箇所で、つがいの出入りが一時的に確認されるなど、繁殖環境の改善に資する事例も確認された。 |
| 計画・取組の課題 | <ul style="list-style-type: none"> ①巢ごとに生息・繁殖状況を引き続き把握し、情報を蓄積。 ②営巣地や餌場付近での影響懸念行為(ロッククライミングや写真撮影)に対する継続的な対応。特に観察者やカメラマンの異常接近による営巣攪乱を防止するため、生息情報の漏えい防止対策として情報管理マニュアルを作成し、広報活動を実施する。 ④新たなペアが生息できる環境整備として、落下した巣棚の復元作業の実施。 ⑤影響行為が想定される行政機関との情報マップによる連絡調整。(作成中) ⑥森林を管理する行政機関に対する森林整備の協力要請。 |

④ 計画継続・終了に関する意見

| | |
|----|--|
| 意見 | <p>イヌワシの生息、繁殖状況については引き続き悪化傾向にあり、今後も影響低減や餌場環境の改善に向けて巢ごとの課題に取り組む必要がある。</p> <p>特に、繁殖が中断された要因のほとんどは人為的な問題であることから、人為的な問題に対しては集中的に取り組む必要がある。</p> <p>現状では計画事項に引き続き取り組みながら、当面は保護回復事業計画の効果を見極める必要がある。</p> |
|----|--|

8 小委員会による計画・取組の検証

(1) 検証者 長野県希少野生動植物保護対策専門委員会 脊椎動物専門小委員会

(2) 計画・取組に関する検証

検証日：平成26年2月6日

| 項目 | 検証 | 意見・付記事項 |
|-----------------|--|--|
| 取組の方法や質は適切か | ○ | <ul style="list-style-type: none"> ・取組は長野イヌワシ研究会、県自然保護課、県環境保全研究所の三者がしっかり連携を取りながら実施していることを確認した。 ・取組は因果関係を押さえており、内容、方法とも妥当である。 |
| 取組内容は量的に十分か | ○ | <ul style="list-style-type: none"> ・餌場環境の改善に資する森林整備は必ずしも量的に十分とは言えない。 ・しかし、モデルケースとして一部地域から5年間取り組んだことの意義は大きいことから、小委員会としては適当と判断した。 |
| 種の保全に対するプロセス | ○ | <ul style="list-style-type: none"> ・取組は種の保全に対して全体的に網羅されている。 ・減少傾向にあるイヌワシの状況を押さえた取組となっている。 |
| 種の保全に対する絶対評価 | △ | <ul style="list-style-type: none"> ・種の保全に関するプロセスは適当であると判断したが、イヌワシの生息・繁殖状況が悪化、もしくは悪化傾向にあるため、絶対評価としては種の保全に至っていない状況である。 ・ただし、長野イヌワシ研究会の尽力によりイヌワシの生殖・繁殖状況は最小限の悪化で留まっていると考えられる。 |
| 計画継続に関する意見 | <p>計画終了・計画見直し 計画継続 (部分的な修正を含む)</p> | |
| 計画継続における配慮事項その他 | <p>イヌワシの現状では保護回復事業計画を終了できる状況にない。 小委員会としては検証結果を踏まえ、次の意見を付して「計画継続」とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①イヌワシの減少傾向を押さえるため、生息状況を引き続き把握すること。 ②巣ごとの課題が明確になったので、個別に対応策を整理して対応すること。 ③餌場環境のための森林整備は、繁殖場所や行動圏に合わせて検討し、より効果のある森林整備に努めること。 ④イヌワシの取組は他県での取組事例が少ないので、取組状況や成果については、積極的に情報発信し、普及啓発に取り組むこと。 ⑤イヌワシは巣立った場所から長距離を移動分散する[※]ので、その行動習性を考慮し、環境省等と県境を越えた取組の連携を検討すること。 ⑥種の動向の絶対評価としては「減少」にあるので、保護回復事業計画の目的達成に向け、上述の①から⑤の取組を進めることが必要。 <p>※ Watson, J. (著)・山岸哲・浅井芝樹(共訳) イヌワシの生態と保全. 文一総合出版. 東京</p> | |

検証凡例 ○:十分 ○:適当 △:やや不足 ×:不十分

9 専門委員会による保護回復事業計画の継続に関する検討・判定

(1) 検討者 長野県希少野生動植物保護対策専門委員会

(2) 自己評価と検証結果に関する検討

検討・判定日：平成26年2月6日

| 項目 | 検討 | 意見・付記事項 |
|----------------------|----|---|
| 自己評価 検証結果 の検討 | ○ | ・長野県が実施した自己評価、及び、脊椎専門小委員会が実施した検証の結果について、その内容を適正と認める。 |
| 取組方法・質 | ○ | ・取組の方法、アプローチは適切である。 ・取組が前進した一背景として、調整役として行政が果たした役割が大きいと考えられる。 |
| 取組内容の量 | ○ | ・餌場環境改善の森林整備はモデル事例として評価できる。 ・今後は取組を他地域に展開するための方策の検討が必要である。 |
| 種の保全に 対する プロセス | ○ | ・繁殖状況の改善に向け、各巣ごとの問題点が明らかにされたことから、今後の対策においては大いに役立つものと考えられる。 |
| 種の保全に 対する 絶対評価 | △ | ・イヌワシの生息・繁殖状況が悪化、もしくは悪化傾向にあり、絶対評価としては種の保全に至っていない状況である。 ・関係者の連携のもと、つがいごと(巣ごと)に保全対策を一層進めることが必要である。 |
| その他 特記事項 | | <p>繁殖地周辺部の攪乱防止の点で成果が見えてきた一方で、関係者の努力にもかかわらずイヌワシ個体群の現状は悪化する傾向にあり、営巣地周辺の攪乱を防げない事例も一部で見られることから、今後とも取組の改善・強化は必要である。 専門委員会としては次の意見を付して「計画継続」とするので、種の動向の実質的な改善に向け、引き続き保全活動に取り組まれない。</p> <p>①脊椎動物専門小委員会の付した意見に今後対応されたい。</p> <p>②事業等の影響行為を事前に減少させるため、効果的な情報収集・指導体制について今後具体的に検討されたい。</p> <p>③イヌワシの繁殖は周辺の森林環境が大きく影響していると考えられるため、今後の評価では、生息場所の自然環境に関する分析も加味されたい。</p> <p>④つがいごと(巣ごと)の保全対策実施においては、地元関係者の理解と協力が不可欠なので、従来にも増して関係者と十分に調整を図るとともに、本事業の中核的な主体であるイヌワシ研究会の体制支援のため、関係機関の連携を強化することが必要である。</p> |
| 計画継続に 関する判定 | | 計画終了・計画見直し(計画継続) 部分的な修正を含む) |

検討凡例 ○: 適当 △: 改善の余地あり ×: 抜本的な見直しが必要

10 保護回復事業計画の評価・検証体制

(1) 計画継続に関する検討・判定（50音順、敬称略）

長野県希少野生動植物保護対策専門委員会 委員

市川哲生、土田勝義、中村浩志、中村寛志、中山洸、平沢伴明、福江佑子、藤田卓、藤山静雄、宮坂利夫、宮本義彦、元島清人、山口輝文、吉田利男

(2) 計画・取組の検証（50音順、敬称略）

長野県希少野生動植物保護対策専門委員会 脊椎動物専門小委員会 委員

市川哲生、中村浩志、吉田利男

(3) 取組の自己評価（敬称略）

長野イヌワシ研究会

代表 片山磯雄 事務局 水上貴博

長野県環境保全研究所

堀田昌伸

長野県自然保護課

市村敏文、直江崇、神谷一成、出口栄也

11 保全団体の概要

(1) 団体・代表 長野イヌワシ研究会 代表 片山 磯雄

(2) 会員数 15名

(3) 団体経歴 1974年 イヌワシの神秘性に惹かれ、片山磯雄氏と常田英士氏により調査を開始
1981年 日本イヌワシ研究会が設立され、片山磯雄氏が副会長を歴任（84年～98年）
1994年 長和町イヌワシ調査グループを発足
1997年 環境省の希少猛禽類調査 長野イヌワシ分布現地調査地域責任者（～01年）
1999年 長野イヌワシ研究会の活動を開始
県内全域を活動エリアとして、イヌワシの調査や保全活動に取り組む
平成26年1月31日 現在

【別紙】 長野イヌワシ研究会による生息・繁殖状況等の調査結果概要

イヌワシ保護回復事業計画の評価検証資料の作成においては、調査データの提供をはじめ、資料の取りまとめ作業など、長野イヌワシ研究会の全面的な協力をいただいた。

1 生息状況の推移

| ランク | H18 | H24 | H25 | ランクの規定 |
|-----|-----|-----|-----|--|
| A | 15 | 14 | 13 | ペアの生息が確認され、繁殖の巣が確認 |
| B | 7 | 7 | 6 | ペアの生息が確認されているが、繁殖の巣が未確認 |
| D | 11 | 11 | 11 | 成鳥2羽または1羽または幼鳥が確認されているが、ペア確認や定着が確認されていない |
| AZ | 4 | 4 | 5 | ペアで生息繁殖していたが消失 |
| Z | 2 | 4 | 5 | ペアで生息していたが消失 |
| 計 | 39 | 40 | 40 | |

- ・生息状況は生息ランクとしてイヌワシ研究会が3年に1回見直しているものである。
- ・生息ランクの定義はH20年に規定が変更されたため、H18年のランクは変更後の規定により再整理した。
- ・評価検証シート、5計画策定以降の対象種の動向で記載した、確実に生息が確認されているペア数は、上表のAランクとBランクのペアを合計した数である。

2 繁殖動向の推移

| | 1975年～ 1984年 | 1985年～ 1994年 | 1995年～ 2004年 | 2005年～ 2012年 |
|-----------|--------------------|---------------------|-----------------------|-----------------------|
| 平均繁殖参加ペア数 | 6.6 ペア (2～9 ペア) | 7.3 ペア (7～11 ペア) | 13.3 ペア (13～15 ペア) | 13.6 ペア (13～14 ペア) |
| 平均繁殖成功ペア数 | 2.8 ペア (1～5 ペア) | 3.1 ペア (2～5 ペア) | 3.4 ペア (1～6 ペア) | 3.4 ペア (2～4 ペア) |
| 平均繁殖成功率 | 43.9% | 38.6% | 25.5% | 24.9% |

- ・裸数字は期間内の平均値、()数字は期間内のペア数の上限・下限値である。
- ・平均繁殖参加ペア数が1975年以降増加しているのは、年々調査精度が向上し、新たに把握されたペアをカウントしているためである。
- ・P.1の「5 計画策定以降の対象種の動向」で指標値として利用した平均繁殖成功率、平均繁殖成功ペア数は、平均繁殖参加ペア数がほぼ同じである「1995年から2004年」と「2005年から2012年」で比較した。

3 繁殖に参加した14ペアの繁殖動向 (1997年～2012年)

| ペア名称 | 前 期 | | | | 前期繁殖 成功回数 | 後 期 | | | | | | | | 後期繁殖 成功回数 | 期間別繁殖動向 | | | | | |
|------|-----|----|----|----|--------------|-----|----|----|----|----|----|----|----|--------------|---------|----|----|----|----|----|
| | 97 | 98 | 99 | 00 | | 01 | 02 | 03 | 04 | 05 | 06 | 07 | 08 | | 09 | 10 | 11 | 12 | 減少 | ±0 |
| No1 | | ○ | | | ○ | 3 | ○ | ○ | | | | | | | ○ | | 3 | | ● | |
| No2 | | ○ | | | ○ | 3 | | | | | | | | | | | - | ● | | |
| No3 | | | | | | - | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | 5 | | | ● |
| No4 | | | | | ○ | 1 | ○ | | | | | | | | | | 1 | | ● | |
| No5 | | | | | ○ | 1 | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | 3 | | | ● |
| No6 | | | | ○ | | 2 | | | | | | | | | | | - | ● | | |
| No7 | | ○ | ○ | ○ | | 3 | | ○ | | ○ | | | | | | | 2 | ● | | |
| No8 | | ○ | ○ | | | 2 | | | | ○ | | | | | | | 1 | ● | | |
| No9 | | | | | | - | | | | | | | | | ○ | | 1 | | | ● |
| No10 | | ○ | | | | 1 | | | | | | | | | | | - | ● | | |
| No11 | | ○ | | | | 1 | | | | | | | | | | | - | ● | | |
| No12 | | ○ | ○ | ○ | ○ | 5 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | 8 | | | ● |
| No13 | ○ | ○ | ○ | ○ | | 5 | | | | ○ | | ○ | | ○ | | | 3 | ● | | |
| No14 | | ○ | | | | 1 | | | | | | | | | | | - | ● | | |
| 計 | 1 | 3 | 6 | 3 | 6 | 28 | 4 | 4 | 2 | 3 | 4 | 3 | 3 | 4 | | 27 | 8 | 2 | 4 | |

- ・1997年から2012年を前期・後期、8年ずつに振り分けて繁殖成功回数を比較した。
- ・期間内における前期後期の繁殖増減について、詳細要因は把握されていない。
(生息個体の高齢化、自然死などがあると思われるが、実態は不明)
- ・巣立ったイヌワシの個体が現時点でどこで生息しているかについては把握されていない。

4 ペア(繁殖地)ごとの課題・特記事項

| ペア名称 | 繁殖回数 | | 課題・特記事項 |
|------|------|----|--|
| | 前期 | 後期 | |
| No1 | 3 | 3 | ・1982年4月(期間外)に春熊猟で繁殖中断 ・2003年4月(前期)に貯水池造成工事で繁殖中断 ・2008年10月雪の重みで落下した巣棚を復元 ・2013年初期に巣への出入りを確認したが、繁殖失敗 |
| No2 | 3 | - | ・2004年から繁殖なし、成鳥1羽になっている可能性あり ・2014年に生息ランク見直し(ランクダウン)が予定されている |
| No3 | - | 5 | ・1977年4月(期間外)にカメラマンの撮影により繁殖中断 ・2006年から新ペア復帰(27年ぶりの繁殖) |
| No4 | 1 | 1 | ・2006年から繁殖なし、現在、成鳥♂1羽のみ ・2014年に生息ランク見直し(ランクダウン)が予定されている ・ロックライミング、パラグライダー、山岳ヘリの影響が推測される |
| No5 | 1 | 3 | ・2010年から繁殖なし ・毎年のように繁殖期に係る工事計画がある地域(事前調整による配慮は実施) |
| No6 | 2 | - | ・2005年より繁殖なし ・新聞記者(カメラマン)の撮影後、寄りつかなくなった |
| No7 | 3 | 2 | ・1999年 県内で初めて2羽のヒナが巣立った場所 ・巣が5箇所あるため、ストレスがあれば移動することが可能 ・2013年 3年ぶりにN2で繁殖確認 |
| No8 | 2 | 1 | ・2013年 3年ぶりに繁殖、新たな巣N4が確認された ・今後、シカ猟の影響が懸念される |
| No9 | - | 1 | ・2012年、2013年に連続で繁殖確認(15年ぶりの繁殖) ・林道からの落石(林道管理上の排土が巣の近くを通過)の影響懸念 ・巣から見える位置の登山道による影響懸念 |
| No10 | 1 | - | ・2000年より繁殖なし ・2013年 5月連休過ぎに繁殖が中断された |
| No11 | 1 | - | ・1995年の繁殖初確認の巣が翌年に落下、以降、巣は不明 ・2013年 幼鳥と親の餌運びが確認された ・春熊猟の影響が懸念 |
| No12 | 5 | 8 | ・全国一の繁殖成功率を誇る繁殖地 ・山岳ヘリの飛行ルートに問題がある |
| No13 | 5 | 3 | ・送電線巡視ヘリの飛行ルートであるが、繁殖期は迂回飛行対応している ・巣は市街地に近いため、情報管理には細心の注意が必要 |
| No14 | 1 | - | ・2000年から繁殖なし ・モミの木に掛けた巣の落下以降、巣の位置を確認出来ない状況 |

・前期期間は1997年から2004年、後期期間は2005年から2012年とした。

・特記事項には可能な範囲で2013年の繁殖状況を追記した。

5 イヌワシ保全活動の取組

長野県北部のイヌワシ(No.1)は2個の巣を持ち、その巣を時々変えながら繁殖していたが、平成18年にひとつの巣が崩落した。

この巣は上部の岩のオーバーハングが少ない場所に造られていたため、巣には雪が積もりやすい状況にあり、凍結した雪の荷重により巣が崩落したと想定された。

崩落した巣は繁殖利用されることが多かっただけに、繁殖に与えた影響は大きかった。

【写真右 巣が崩落した後の岩棚】



イヌワシの巣の修理は国内の実施例があり、その効果が認められていることから、イヌワシ保護回復事業計画の保全活動と位置付け、平成20年10月に長野イヌワシ研究会により、巣棚の復元作業が実施された。

現場は人2人の作業が精一杯な崖面の急峻狭小な場所で、危険かつ困難な作業だった。

【写真左 パイプの組み上げで巣棚を復元】

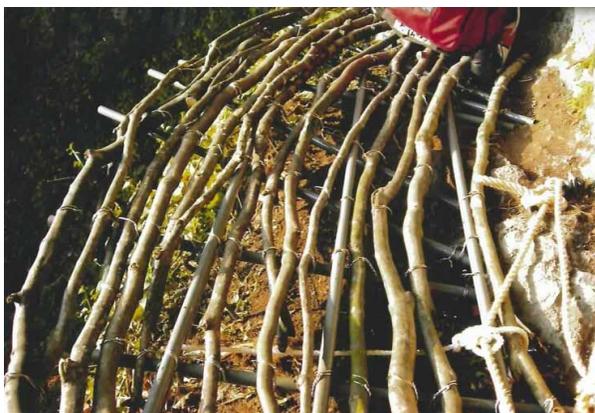
巣棚は岩盤にドリルで穴を開け、9mmの鉄棒をアンカーとして打ち込み、φ19mmのステンレスパイプを格子状に設置した。(写真上)

次にφ3~4cmの細枝を針金でパイプの上にアーチ状に固定した。(写真右)

(棚の大きさは95cm×190cm程度。)

また、隙間風は抱卵に良くないため、産座周辺の棚の隙間には笹や落ち葉を詰めた。

平成25年には復元した巣棚に成鳥の出入りが確認され、今後における繁殖活用が期待される状況となった。



写真：長野イヌワシ研究会提供